

く勇者は逃れられないく

サークル
ドレイン

「エム〜」

「は。ここに」

「勇者様がもうすぐここに来るわ」

「では、殺しましょう」

「うん。そういうのはもう飽きたの。ねえ！ 賭けをしない？」

「賭け、ございますか？」

「うん。あたしはね。今度の勇者様には期待してるの♥」

「勇者様……期待……」

「そう！ 期待よ！ あたしはね。強くて！ 優しくて！ 誇りある人間最強の騎士である勇者様のユーリに期待してるの！」

彼の積み上げてきた全てを蹂躪し、足掻かせ、絶望させ、どうしようもなくあたしに愛されたいと願わせる。男としての全てを自らの手で失くし、そして…、あたしの愛娘のオナホ奴隷に墮としたいの。彼はきっとこの期待に応えてくれるはずよ！ 名付けて、『あたしの勇者様』大作戦っ！」

「いささか、難しいのでは…。人間は脆いものです。魔王陛下」

「え〜っ。今度の勇者様は、違うと思うな。だから賭けをしましょ」

「かしこまりました。して、何を賭けましょう？」

「うふふ♥ それはね…… 『で、どう？』」

「…っ！ まさかっ！ よろしいのですか？ 魔王陛下は契約至上主義のお方。一度賭けが成立すると、戻れませんよ？」

「うふふふ。楽しみ〜♥」

序章 実力の差。さらに捕縛。

「ギガブレイムっ！」

少年の剣が薙ぎ払ったのは、影だった。しかし影が2つに別れて断末魔を上げながら消えてゆく。

「遅いっ！」

少年の剣よりもさらに早い連続の剣撃が他の影を切り裂いてゆく。しかし少年の剣ほどの威力はないのだろう。何度か剣を振るわないと影は抵抗を止めなかった。女剣士は必死で剣を突きつけ、影を滅する。

「お疲れ」

「そっちこそ」

2人は拳をコツンと当てて笑った。とりあえずの敵はもういない。しかし気を抜く訳にはいかなかった。今は魔王の城のまさにその手前。開かずの門のすぐ近くまで来ているからだ。

「敵は思っていたよりも、多いわね。でもこんな所で体力を削る訳にはいかないし」

「うん。そうだね」

オレンジ色の髪が後ろで三つ編みにまとめられている。その少年の名は、ユーリ。騎士国家ネヴァにて勇者と認定されている。つまりはネヴァ最強の騎士であり、魔王討伐を命じられている人間という意味だ。ネヴァ以外の国でも勇者は、超法規的優遇措置が取られている。つまりは人間の国であればどの国であっても彼は、英雄であり希望なのだ。

魔王を倒し、世界に平和を取り戻す可能性がある男。勇者ユーリとして。

対して、山吹色と言っても良いほどの濃い金色の髪を持つ女剣士メリイ。彼女はユーリの幼馴染だった。子供の頃はユーリよりもむしろ彼女の方が強く期待されていた。『光速のメリイ』。そんな風と呼ばれていた。しかし、ユーリが剣の技能をメキメキと上げていくと、

彼女は騎士団のナンバー1からナンバー2の座に落ちてしまった。

もちろん騎士団にいた頃のメリイはユーリを妬んだりもした。しかし彼の屈託のない笑顔を見る度に自分がつまらないことにこだわってしまったと反省し、まるで姉のようにユーリの成長を喜び、褒め称えるようになった。

2人にはこういう逸話がある。

ある日、ユーリが歯を磨いているとユーリの口の端から歯磨き粉の泡がポトポトと落ちていた。しかしユーリは全くそのことに気が付かず、歯を磨いている。いかにも、ユーリらしい話だ。才能も実力もあるが、いかんせん日々のちよつとした事に気が回らない。天才タイプというやつだ。運が悪かったのはその時彼が着ていた服が、騎士団の正装だったことだ。正装に歯磨き粉をこぼしてシミにでもなったら懲罰は免れない。

そこにナンバー2に落ちたばかりのメリイが通りかかった。彼女はユーリの服を見て、その場でそつと石畳に膝をつき、ユーリの服のシミを優しく拭きとっていった。その姿はまるで出来の悪い弟としっかり者の姉のようであったと人は言う。

才覚に恵まれ、圧倒的な実力を誇りながらもどこか間の抜けている勇者ユーリと、そのユーリよりもスピードでこそ勝りながらも実力全体では劣る、しっかり者の女剣士メリイ。

彼らの逸話は、必ず2人セットで語られる。2人セットで挑んだミッションは必ず成功してきたからだ。只の1度だつて失敗したことはない。そういう事情も手伝つて、騎士国家ネヴァは2人をコンビで魔王討伐に向かわせたのだった。

ユーリ、メリイはお互いに顔を見合わせてから、開かずの門を睨む。そして第1歩を踏み出したまさにその瞬間。青白い光が足元から光り始め、それらの光は束になり、天に向かって柱のように伸びていった。

2人は光の束を避けるため、跳ねようとした時点で遅まきながら、ようやく気がついた。

(……動けないっ！)

足が動かない。手も顔も。全くピクリとも動かないのだ。

光の束の向かう先、天から声がした。魔法で転移された声ではない。間違いなくこの場にいる者の声だ。むろん動けない2人は天を仰ぐことなど出来はしない。しかし声の主が若い女性であること、そして気品と威厳を兼ね備えた声色であることはすぐに分かった。

(まさか……そんな……)

天が割れ、地が怯え、大気が揺れる。

ユーリ、メリイともに直感し、確信した。この女が魔王だと。

「こんにちは。あたしの大事な勇者様。ずっと……ずっと会いたかったのよ」

「う……」

「あら？　こちらはどなた？　なんであたしの勇者様にくっついてるの？」

魔王が天から舞い降りて、地に足を降ろす。たったそれだけで2人は体中の空気と水分を絞り上げられるようなプレッシャーに襲われた。

「女？」

メリイよりも淡い儂げな黄金色の長い髪。淡いピンク色のドレス。大きすぎる胸。長めのまつげに魔族の証明であるオレンジ色の瞳。見た目だけで言えば若く美しい女王といったところだろう。されどその見た目とは全く異なる圧倒的な魔力が全身から漏れている。恐らくは魔力など見せる気など無いのだろう。体格に勝るものが否応なく服の上からでも、筋力を誇示してしまうかの様に。否。そんな可愛いものではないかもしれない。親の惨殺死体を片手に無邪気に笑う美女が如く、圧倒的な異質感。そういうものを連想させるだけの魔力を彼女は全身から、溢れさせていた。

魔王はメリイの顎をくいと持ち上げて、ユーリの側にいた人間の性別を確認した。間違はなく女の顔だ。魔王は怒りを抑えきれず、奥歯を噛む。そして抵抗どころか動くことさえ出来ないメリイの頬にビンタを一閃、叩き込んだ。

倒れこむことさえ出来ないメリイはその威力、その衝撃を脳の奥まで叩きこまれて声をあげる。

「ぐっ！」

「その顔……、生意気ね。もしかしてあたしの勇者様に取り入ろうとしたの？」

魔王がパチンと指を鳴らすと、メリイはそのまま地に沈んでいき、首から上だけが残った。その姿はまるで生首を地面に直接置いたようにも見える。

「そこで、見てなさい。あたしと勇者様のラブラブっぷりを♥」

魔王が近づくと、ユーリはなんとか言葉だけは吐けないかと苦戦しているところだった。それはつまり、呪文の詠唱である。体が動かない以上、剣では戦えない。ならば魔法で一矢でも報いれば、活路が見い出せるかもしれない。無論ぶつける呪文は最強の魔法。生半可な魔法では何をされるか分からない。最強最大の魔法をぶつけるしかない。

「あら？ 何かお話したいの？ いいわよ。あたしの勇者様♥」

「ぐぐ」

魔王が自らの唇にチョココンと指で触れ、その指先をそのままユーリの口元に移す。

「あはっ。間接キスになっちゃった♥」

魔王がそう言うと、ユーリは口元だけは動けるようになった。腕は振れない。足も上がらない。だが、唇だけは動く。

『ギガレイン』っ……っ……」

立っていることさえ出来ない程の暴風雨の中に雨粒よりも多くの落雷。雷雨が空間ごと収縮させ、見えん限り地面を飲みつくす。有機物は何一つ残らない。呪文を放った者とその者が認める仲間以外は。すべてが無機物に変換される。

人間が人間でいられる状態で放てる最強最大の魔法『ギガレイン』。その威力は「敵軍にその呪文を扱える人間がいれば、どんな状態でも即座に降伏するべきである。なぜなら、その呪文が一度放た場合、半径100キロメートルは以後3000年、草木が生えることはないからである」と人間世界の標準的な軍事の教科書に記載がある。

重ねて言うが、これ以上強力な魔法は人間には撃てない。今これが放てる人間はユーリ位のものである。しかしそれでも彼の魔力は底をついた。すべての魔力を放出してようやく『ギガレイン』一発。これが人間の限界だった。

ユーリが激しく呼吸する。地面にはメリイがいる。相変わらず地面に首から上だけがある状態で表情は見えないが。対して魔王は見えない。粉塵が舞っているから見えないからなのか、ここにはもういないのか、あるいは殺すことができたのか。どちらにせよこの場にいなければ身体も自由に動かせるはず。

ユーリは（メリイを助けなくちゃ）と、そう思った。しかし身体は動かない。魔王はいないはずなのに？

「砂遊びが好きなお年頃だったかしら？」

ユーリの背中に冷たい汗がつたう。動けないのは魔王がまだここにいるからだ。追い払う？ 一時的に撤退させる？ ましてや殺す？ 甘い考えだ。

『ギガレイン』は人間にとっては最強の魔法でも、魔王には見戯。悪戯レベルにしか過ぎない。

魔王は、そのドレスにホコリひとつ付けずにその場で微笑んでいた。そしてウインクを一つ。先ほどユーリの唇に付けた指を自らの唇にちよんと押し当てて。

「なっ…、なんで……」

「なんで？ あらあら。あたしがこの程度でどうにかなると思った？ もう。そんなわけないでしょ？ 愛しの勇者様♥」

魔王は無邪気に笑うと、ユーリをギュッと抱きしめる。大きな胸がユーリの顔を包み、呼吸しづらい。それでも魔王はまるで何年も会っていない大切な恋人、あるいは弟、息子を包容するかのようになぎゅっと抱きしめた。そしてそのまま動けないユーリの耳元で囁く。

「教えて欲しい？ 『ギガレイン』からどうやって生き残ったか」

ユーリの答えを待たずに、魔王は言葉が続けた。

『ギガレイン』は味方だと思ふ者を殺さないバリアを発生させるでしょう？ あたしはそのバリアだけを作り出せるの。だからあたしに『ギガレイン』は効かない。知らなかった？ 魔王には剣も魔法も効かないのよ♥」

ユーリは震えていた。口だけはまだ動く。しかしもう魔力は残っていない。抵抗できないのだ。それどころか、もしも身体が動かせたとしても、剣で戦うことも無意味なのだろう。魔王は明らかに嘘をついてはいない。そう思わせるだけの凄みが魔王にはあった。

「さ・て・と……ああっ！」

魔王はユーリから離れると、慌てたように自らの口を両手で塞いだ。まるで自分が可愛

いと分かっていながら、男に媚びを売る若い女子のように。

「ごめんなさいっ！ あたしったら会えた喜びですっかり自己紹介を忘れていたわね♥
では、改めて…。はじめまして勇者様。あたしがあなたの天敵。魔王のリリムよ。リリム♥って呼んでね」

「ぐっ……………」

「あれあれあれ？ どうしたのかなぁ？ 勇者様。お口は動かせるはずでしょう？ 自己紹介して♥ とつても大事にしてあげるから♥」

「……………」

ユーリは沈黙した。それは魔力の回復を早めるためではない。せめてもの抵抗だ。動けず、魔法が通じない以上は、あとはなぶり殺されることを覚悟するだけ。それならばせめて心だけは自分の思うがままにありたい。最後まで魔王に抵抗する勇者でありたい。そう思ってたの事だった。

「むぐ。ダンマリ？ しょうがないなあ」

「魔王陛下。お任せあれ」

魔王のボヤキに返事したのは、ユーリではない。むしろ地面に埋められたメリイの方から聞こえた。しかしメリイではない。もっと声艶やかで、甘ったるさが残る声。それはメリイと重なり、地面からすーっと生えてきた。

「はじめまして。勇者様。わたくしは使い魔のエムプサ」

「え…エムプサ？」

「はい。短く『エム』とお呼びください」

その女性は、褐色の黒髪。淡い緑色のドレス着ていた。魔王同様に胸元が大きく開いている。そして魔族の証明であるオレンジ色の瞳。

ユーリは困惑していた。

(使い魔？ 今、自分で使い魔と言ったか？)

一般的に使い魔とはせいぜい子供程度の魔力しか持たない。その為、使い魔は魔族の中でも、いわゆる奴隷階級に属する弱いモンスター扱いだ。

しかし今日の前の、地面とメリイをするりと抜けた魔族は違う。完全に別次元の魔力を持つている。ユーリでは歯がたたないどころか、先にリリムを見ていなければ、こちらが魔王だと思っていただろう。気配を探るまでもない。例え万全の状態で挑んだとしても勝てる可能性は方に一つもない。そう理解できるほどの圧倒的な魔力を隠そうともせずに行んでいる。にも関わらず、魔王に対して丁寧に接する所が余計におぞましさを際立たせる。ユーリが逆立ちしても勝てない使い魔を完全服従させている魔王。ユーリは自分が人間でいることに限界を感じずにはいられなかった。

「なあに？ エム。使い魔の分際であたしと勇者様のラブラブな一時を邪魔する気？」

「いえ。決してそのようなことは。しかし恐れながら申し上げます。魔王陛下。勇者様は長らくの旅路で大変にお疲れの様子。ましてやこのような小娘をつれていればなおのこと」

エムはそう言うと、足元にあるメリイの頭を踏み、そのまま体重を掛けた。体重だけではない。足の裏から重力系の魔法を発動させたのだろう。闇の呪印が仄かに光り、メキメキとメリイの頭蓋骨を軋ませる。

「や…やめろ…」

「城に勇者様をご招待されては如何でしょうか？」

「うん。でもなあ……。今日初めて会った殿方を自宅に招待するなんて、嫌われない？」

「そのようなことはございません。勇者様は、魔王陛下にお会いになるためにここまでいらしたのですから」

魔王をなだめるように、エムはそう言うとユーリを見た。ユーリの瞳の奥に何かを仕込むように。

「ま、まおうへ……。へいか……。わ、わ、わ……。わたしをあなたのおしるに……」

「まあっ！ 来てくれるの？ えへへ。勇者様のお願いなら仕方ないわね。エム。行くわよ！」

「は」

ユーリは、決して城に行きたいなどと言ったつもりはない。しかし勝手に口が動く。どうやらエムに何かの呪印をかけられたらしい。魔王は動けなくするだけだったが、使い魔の方は自由に他人を動かすことも出来るようだ。

「この女は始末いたします」

「そうね。やっちゃって」

「ま、待ってっ！」

ユーリはリリム、エムに声をかける。それは勇者らしからぬ、情けなくも命を懇願する声だった。

「お願いだっ！ メリイを殺さないでくれ。頼む！ ……頼むよ。幼馴染なんだ。大切な……大切な仲間なんだ」

「ふん？」

リリムは悩む素振りを見せてから、エムに命じる。

「勇者様のお願いだから聞いてあげましょう。エム。殺さないでそのままお城に連れ帰ってちょうだい」

「は」

エムの左手に呪印が浮かび上がる。そしてその左手に呼応するようにメリイは浮かび上がり、エムの足を犬のように四つん這いで歩き始めた。メリイは元々がプライドの高い女だ。屈辱だろう。しかし舌を嚙んで自殺することも出来ない。身体の内は一切きかないからだ。一方、ユーリは魔王を抱き上げられた。まるで母が赤子を運ぶように。魔王の大きな胸が顔にのしかかり、まさに乳飲み子に乳を与える母のような構図になった。勇者と呼ばれたユーリにとってもそれは震えるほどの屈辱。他の誰かが見ていないことだけが

救いだった。しかし一方でユーリは実感しつつあった。今の自分と魔王の差はこんなもんじゃない。もっと離れている。赤子扱いされるだけ、優遇されているのではないかと。



第1章 勇者は下半身裸でいなければならない。

~~~~陰毛焼却とチングリ返しレイプ添え~~~~

身体の自由を奪われたまま、2人は魔王の城に連行された。その城は人間の城とさほど変わらないように見える。レンガを積み上げて作られた頑強な城。人間の城と最も違う点は地下に行けば行くほど、上位の魔族の居住区となること。最下層に魔王の玉座がある。むろん2人はそこまで連れて行かれた。

魔王の玉座は人間の王族が座るそれに比べて、豪華とは呼べないものだった。無論一般人の手が届くほどの安い椅子ではない。しかし豪族や貴族なら座っていてもおかしくはない程度のものだ。

「意外かしら？ あたしたち魔族より人間の方が強欲で」

ユーリは本心を射抜かれて、慌てて視線を外そうとした。無論動かない。しかしリリムの指摘は、正にその通りだった。豪華な調度品も置かれてはいるが、人間の王と比べるべくもない。せいぜい金持ちと呼ばれる人間と同程度だ。

「まずは、勇者様にお部屋をご案内しなくちゃね。今日からここで生活するんだもの」

「……ぐ」

「あらあら？ 勇者様？ もう魔力が戻ってきたの？ スゴクイっ！ いい子でちゅね。イイコイイコ」

リリムがユーリの頭を撫でる。リリムの指摘通り、ユーリは少しづつだが魔力を取り戻しつつあった。『ギガレイン』以外にも魔法はある。それをどう使うか。そのことを考えていた。しかし……。

「でも、そんなちっぽけな魔力じゃどうしようもないから、もう少し我慢しようね♥」

「……………」

魔王の優しい口調。少なくともユーリには、リリムが演技しているようには見えなかった。ただただ圧倒的で、ただただ一人の女性として弱い男子に接しているようにしか思え

ない。全く。完全に。あるいはこう考えるのが正解かもしれない。そもそもリリムにとってユーリは陵辱するに値せず、そうなるまでここで育てようとしているのではないか？ それまで母のように愛を持って接する気ではないのか？ 魔王なら十分にその目算はあり得る。それが出来るだけの時間も叡智も、そして魔力もある。

魔王は微笑みながら、玉座の部屋の奥のドアを開けた。むろん手を使って開けなどしない。両腕の中には、ユーリがいる。瞳の奥に呪印を浮かべてドアを開けたのだ。

「はくい。どうぞ♥」

暗がりでも魔王が光の魔法を唱えると、壁の松明用の窪みに火が灯る。そこは拷問用の奴隷を保管する部屋だった。

拷問用に拘束手錠が嵌められた鋼鉄製の机。奴隷を拘束しておくためのレンガに埋め込まれた鋼鉄の手錠。そして奴隷が寝るための硬くて冷たい鋼鉄のベッドに、用を足す為の大きめのツボ。

ドアノブは内側にもついており、中からでも開けられるようになっていた。もちろん魔法の鍵がかかっているであろうから、魔王の許可無しでは開かないだろう。

「メリイ…だったわよね？ その女はそっちにね」

リリムは指だけでエムに指示をした。それはつまり壁に埋め込まれた手錠にメリイをかけておけ。そういう意味だ。

「かしこまりました」

エムは恭しくその頭を垂れると、メリイの頭のあたりに更なる呪印を浮かべ、声には出さずに笑った。エムの口角が上がるのに反応するかのようにメリイは自らバンザイをするように手錠に両手を通し、エムが鍵をかけるのを待つ。ユーリはようやくメリイの表情を見る事ができた。その表情は怒りに満ちている。口も聞けない状態でありながら、瞳の奥に明確な怒りと、敵意が籠っている。

「あらあら。うふふ。何か言いたげね？」

エムはそう言うと、メリイの唇に向けて息を吹きかけた。魔王の指先間接キス同様にメリイの唇だけに自由が戻る。ほんのりと痺れを残してはいるが…。

「は…離さないよっ！」

「あらあら。勇者様と違ってお転婆なのね。とっくの昔に勇者様の方は、あたしたちとの実力の違いに気がついてるわよ？ だからさっきから抵抗の意志を見せずに、虎視眈々とあたしたちを殺そうと計画を練っているのよ♥」

「っー」

「そっちの女は出来が悪いみたいね。いいえ。出来が悪いと言うよりもお馬鹿さんなのかしら？」

「……………」

リリムの言葉にメリィは沈黙せざるを得なかった。その言葉の真実味を何よりもユーリの驚きの表情が物語っているからだ。エムはメリィの瞳を見つめて、笑う。そして動けない彼女の手首の手錠に鍵を掛けていった。物理的な手錠の他に、魔法の鍵も掛けたのだから。手錠の上に見たこともない文字の呪印が回っている。

「はい。勇者様はこっち」

リリムはそう言うと、抱えていたユーリを机の上に下ろした。そして、ベルトを外す。

「なっ……………なにを……………っ！」

ユーリが慌てるも抵抗は出来ない。動くこと自体できないのだから。そうこうしている間にリリムは勇者のズボンを脱がせてしまった。決して破くのも切り裂くのもなく、まるで母親が子供のズボンを脱がすように、優しく脱がせてしまったのだ。

「や……………やめて……………」

「ダメよ♥ 人間には人間の法があるでしょう？ 法律とか規則とか。魔族にも有るのよ。知らなかった？ ここでのルールはあたし。『勇者は下半身裸でいなければならない』って今、あたしが決めたの。だから脱いで脱いで♥」

リリムはユーリのパンツの中に細く長い指を忍ばせていく。そして抵抗できないままの

ユーリのオチ○チンの根本から半分だけが外気に晒される。

「きゃっ！ 見てみて！ エムっ！ 勇者様のオチ○チんちっちゃくて可愛いわよ！」

「失礼……ぷっ」

オチ○チンの先っちょだけを隠されたままで、股間を鑑賞される。リリムは完全に楽しんで笑っているし、エムはユーリの卑小さを嘲笑っている。

「はい。御開帳♥」

その言葉を吐いたのは、魔王リリムだった。ユーリは息を呑む。されど瞳を閉じることには許されない。まばたきさえも魔王の許しがなければ出来ないからだ。少しづつ、少しづつパンツを引き下ろされるのを黙って見つめていなければならない。自分の股間を見て、笑う宿敵の、笑顔を見つめていなければならないのだ。

2人の宿敵は魔族にも関わらず何の邪気も放っていないかった。ただただ楽しんでいる。自らが絶対安全で、人間の男、それも選り抜かれた勇者を何の抵抗もさせずに恥部を晒すことが出来るからだ。そこには悪意が無い。人間の子供が誕生日にケーキを出されて、喜ぶように何の邪気もなくユーリの股間を見つめている。ユーリは、2人の魔族が何の邪気も持っていないことが分かるのが余計につらかった。悪意さえ持ってくれば、こちらも気持ちだけは保ちやすいのに。子供のように喜ばれると、どうにも対策が打てない。敵意のない笑顔に対抗する心理的防御をユーリは持っていないかった。

プルンっと、パンツから弾けるように飛び出した肉の棒。それを見てリリムもエムも嘲笑った。ユーリのオチ○チンが包茎だったからだ。

「や〜だ〜♥ 勇者様ったら、包茎じゃない！」

「これは……クスクス。これでは、とても勇者とは……クスクス」

ユーリの顔が真っ赤に染まる。鼻息さえ熱く感じる。リリムの満足気な笑顔から視線を逸らす。それだけが今のユーリにできる唯一の抵抗だった。しかし視線を動かした先には、リリムと違って、明確に侮蔑の笑いを浮かべるエムがいた。『殺してやる』そう思ったかったが、初めて出会った時同様にエムを包む魔力の前にユーリは怯えてしまった。ユーリが強いからこそ分かる。今の自分ではエムにさえ、絶対に勝てない。

野生の勘が、戦いの経験が『黙っておけ、殺意を悟られるな。殺されるぞ』そうユーリに警告する。しかし包茎を見られて、嘲笑われて、屈辱だった。よりにもよってメリイの

見ている前で、宿敵である魔王にひん剥かれるとは…。

「陰毛、邪魔〜。エム〜。なんとかして〜」

「は。では包茎にふさわしいよう、パイパンオチ○チンに…」

「う…っ！」

エムの指先に炎が灯る。規模は小さい。問題はそこじゃない。その色だ。白銀！ 炎の魔法は術者の魔力規模に応じて色が変化する。ユーリは人間でも最高クラスの黄金。メリイは黄金の一つ下のランクで青だ。黄金の上位ランクに白銀、さらにその上に黒く光る炎があるとは聞いていた。しかし白銀の時点で神話レベルの誇大伝承だと思っていた。到底ありえない寓話のようなものだ。しかし今目の前に白銀の炎が揺らめいている。一体どれほどの魔力がこもっていれば、あんなとんでもない色になるのだろうか。

「ち…近づけないで…」

エムの燃える指先がユーリの下腹部に近づく、ユーリは慌てた。黄金の炎でさえ、放たれたら、騎士団一個小隊を焼きつくす。それなのに、更に上の白銀。もしもアレが自分に放たれたら…。

引きつけを起こすユーリの頭をリリムが撫で言った。

「大丈夫よ。大人しくしててね♥」

「陰毛が邪魔です。勇者様。剃るより燃やすほうが早いので。…失礼致します」

「そんな…でも…そんなとんでもない…魔力で焼かれたら…」

「とんでもない魔力？」

「…ぶっ」

エムが嘖きだすと、リリムは「笑わないであげてよ」と注意しながらも、笑った。つまり2人にとってこの程度の魔力は魔力のうちに入らないということなのだろう。ユーリは怯える心を止められはしなかった。しかし抵抗どころか動くことさえ出来ないで、されがままに、オチ○チンの根本の毛をエムの指先で燃やされ、あつという間に生えていな

かったことにされてしまった。

「うんうん♥ エム、上手じゃない」

「ありがとうございます。魔王陛下。しかし、人間という生き物は、性器の下部分にも毛が生えるそうです」

「マジ？」

「は。つきましては、勇者様にチングリ返しをお願いしたく存じます」

「だって♥ 勇者様、チングリ返ししてちょうだい。ね？ 綺麗にしてあげるから。勇者様もオチ○チンに毛が生えてるなんて、嫌でしょう？」

「う……………」

ユーリは分かっていた。何も答えなければ、エムは再び自分に答えさせるだろうと。エムが以前やった「お城に行きたいです」と自分に答えさせた呪印。あれをかけてくるだろうと。また、無理やり「綺麗にしてください。オチ○チンの毛を焼き尽くしてください」と答えさせるだろうと思った。だから黙った。自分から、自分の意志では言いたくないからだ。

しかしその予想は見事に外れ、沈黙が漂う。

少しの沈黙の後、ユーリの瞳に映ったもの。それは魔王リムが優しく微笑みながら、ユーリの答えを待っているという、可怪しい状況そのものだった。傍で見ているだけのメリイにはどうして沈黙があったのかは分からなかったが、ユーリは理解できた。

『自分で答えろ。自分の意志で、オチ○チンの毛を燃やし尽くして綺麗にしてください。と言え。そしてチングリ返しをして、魔王陛下であるあたしにア○ルもオチ○チンの裏もタマも全部見せろ』

そういう意味だ。少なくとも今回は自分の意志でそう答えることを魔王が望んでいる。だからエムは何もしなかった。そしてリムは待った。勇者の懇願を。自らの恥部の毛を焼き尽くして欲しいとの懇願を。

もしも勇者が誇りだけの生き物ならば、きっと何も答えなかっただろう。しかしユーリは違った。自分の強さを認識している。自分は人間という種族の中では最強だ。だから自分が死んだら、もう誰も魔王には逆らえない。戦うというコト自体の選択肢が消滅する。

魔王は討ち取らなければ人間世界に平和は訪れない。だから。自分が恥をかくだけでこの場が乗りきれぬのなら……。進んでそうするべきだ。

そう思った。勇者としてそう思わずにはいられなかった。

ユーリが口を開く。

「か、下半身の……じ、自由を……」

「ダメめっ！ ちゃんと聞かせて、勇者様。『オチ○チンの毛は包茎の僕にはまだ早いから、毛を燃やして、もう生えないようにしてください』って」

「そ……そんな……」

ユーリの視界に少しだけエムの燃える指先が入る。視界の中心には、聖母のように微笑む魔王。従うしかユーリには道が無かった。唯一自由に動く唇をプルプルと震わせながら、ユーリはその言葉を口にする。

「お、オチ○チンの……毛は……ほ……包茎の僕には……まだはや……早いから……毛を燃やして……も、もう……生えないように……し、……してください……」

ニンマリとリリムが笑う。まるでおつかいを成功させた子供を見る母のように。

「下半身の自由は、まだ勇者様に早いかな。でも、いい子だね。ちゃんと言えたね♥」

リリムが微笑む。ユーリの頭を優しく撫でながら。そしてその笑顔とほぼ同時にユーリのア○ルのあたりに呪印が蠢いた。そして下半身が宙に浮いて、チングリ返しの状態で固定される。

「わあ。ねえ！ 見てみてっ！ エム！ 包茎の裏筋ってこんなになってるのね！」

「は。少し黒ずんでいるのは、床オナニーと呼ばれるオナニー法のせいかと」

「ユカオナニー？」

「何でも相手のいないモテない男子。特に包茎男子は床にオチ○チンを擦りつけて、地べたに射精するとか」

エムの解説にユーリの額、鼻の頭に汗が吹き出す。事実その通りであることもさることながら、床オナニーをしていることをメリイだけではない。魔王にもエムにもバレたことが恥ずかしかったからだ。たとえ宿敵でも、リリムもエムも人間ならばとんでもない美人だ。そんな美しい女性に、『床オナニーが好きなモテない包茎男子』とバレたのだ。

「そっかあ。勇者様、モテないんだあ。なんだか残念だなあ」

「く……」

「あのね？ 勇者様。女はね？ モテない男子よりもモテる男子を射止めたいと思うの。分かるかな？」

「……うう……」

「というかモテるってどういうことだか分かる？」

「………わか……わからないです」

「……クスクス……」

エムの漏れ笑いが響く地下で、勇者は瞳に涙を浮かべつつあった。完全に心の中まで魔王に、なぶられている。今ようやくやく分かった。リリムは勇者である自分に反骨心を抱かせないためにずっと、優しく接していたのだと。その為に聖母のように微笑んでいたのだと。実際、その通りになった。もはやユーリがこれから反骨心を持ってリリムに接することなど出来そうにない。そういう感情の種はすべて焼きつくされた。

「モテるっていうのはね、勇者様。ちゃんと女の子に精液を差し出せるってことなのよ」

「う………うう」

「エム。やっちゃって」

「は」

エムはユーリの陰毛を焼くため、ユーリのオチ○チンの付け根に燃える人差し指を掲げ、その熱で毛という毛を丁寧に、一本も残さぬよう確実に燃やしていった。ア○ルも同様だ。

ア〇ルの時はエムが追加の魔法をかけたのだろう。ユーリの両手の甲に呪印が光り、ユーリは自らのお尻の肉を掴んで、ア〇ルが見えやすいように、思いつきり開いた。

「み、見ないで……お尻は……お尻は……」

「ダーメ。むしろしつかり見せて。隠し事する男子はあだし、嫌いよ」

「う……うう……」

ユーリのア〇ルがこれ以上ないというところまで広げ終わると、エムは丁寧にア〇ルの毛を燃やしていった。もはやユーリの恥部には一切の毛が無い。それどころかあまりにも綺麗に陰毛をもやされてしまったので、赤ちゃんのように、あるいはむきタマゴのようにツルツルのすべすべだ。

「うんうん♥ 綺麗になったね。これでもう勇者様のオチ〇チンは下品じゃないよ。さて、勇者様♥」

「……………?」

「いい子に我慢できて、偉かったね。褒美タイムだよ。今日最大のチャンスをあげるね。一発だけ好きな魔法を撃って良いよ。もうだいぶ魔力も回復したでしょう?」

「……………」

『ギガレイン』はさすがに無理でも……他のならいけるでしょう?」

『ベ・ガン』っ……!」

魔王の言葉が終わるか否かの正にその瞬間ユーリが放った魔法は、ユーリの視界に入るものだけに極めて強い重力をかける魔法だった。一般的にドラゴンの群れなどの大きな範囲にかけてかける魔法だが、この時のユーリは魔王にだけ。それも魔王の頭部にだけに範囲を絞って魔法を発動させた。こうすることで狭い範囲にした分、さらに強力な重力がかかるからである。

しかし……魔法は発動しただけで、何も起きなかった。加重重力が発生していない……。

「な、なんで?」

絶望を浮かべたまま、ユーリは思わず本音をこぼした。

「ごめーん。このお城……人間は魔法が使えないようにしてるんだっただ♡ もう千年以上人間が来なかったから、すっかり忘れちゃってた。あたしったら、うっかりさん♡」

リリムは笑った。彼女が本当に忘れていたか否かはこの際どうでも良い。動けない上に魔法も使えない。もはや人形そのものではないか。その城に入った時点で勝ち目どころか、希望さえ無い。

ユーリは今度こそ、観念した。自分の完全敗北を強く感じずにはいられなかった。思わず涙が零れる。感情が決壊し、溢れだすとともに声をあげて泣いた。努力、修行、数多の実践、膨大な魔法の知識。それはらすべて何の意味もなさず、完全に敗北が確定したからだ。自分の人生が無駄だったのだと今ようやく、実感が湧いてきた。精神が崩壊しないように身体が自動的に反応を示したのだ。声を上げて泣くという反応を。

「うふふ」

「クスクス」

2人の魔族はその声をしばし鑑賞し、楽しみ、慈しんだ。

「最高ね」

「は。極上中の極上かと。包莖童貞男子で、人間界最強の実力を持ち、それ故に誇り高き勇者の…、涙にございます」

「…蕩けそうだわ。こんなに良い物を提供してくれたんだもの。もう一つご褒美をあげましょう。いいえ。奪ってあげましょう」

「は？」

エムが不思議そうな顔をするも、リリムの視線の先のモノに気がついて口角を上げた。

「勇者様もお喜びになるかと」

「そうね。悦ばせてあげなくちゃ。って、あたしがするんだから、エムは見てるだけよ！  
っー！」

「心得ております。陛下」

声を上げて泣くユーリの前に魔族2人。彼女たちがチングリ返したユーリに、顔を近づける。エムは、ユーリの顔を近くで見ようと頭側にまわり、リリムはユーリのお尻側から回り込み、その男根を鷲掴みにした。

当然リリムの胸が、ユーリのお尻に当たる。お尻ごしにも分かる柔らかさと、豊満さ。アールに暖かな鼻息がかかるほどにリリムの顔が近い。それだけでユーリは勃起してしまっただ。タマが縮んでその分オチ○チンが硬くなり、膨らんでいく。「あはっ♥」とリリムが笑うと、余計にそれは硬く、自身のへそに付くほどに反り返った。そしてリリムの細く美しい指先が牛の乳を絞るが如く、しっかりと握りこまれていく。

「こういうのは好きだったかしら？」

たった一言。リリムの一言が発せられた瞬間、ユーリは自分でも経験したことのないほどの精液を童貞オチ○チンから吹き出してしまった。あまりにも、あまりにも美しい指先で触れられて、オナニーのたびに妄想した女性像よりもリリムの指が素晴らしいと感じてしまい、射精してしまっただ。

「あらあら。もう出しちゃったの？ ダメよ。早漏だなんて。……あ、そうだっー！」

ユーリのオチ○チンの先から白濁の液体が垂れる。それをリリムはユーリのオチ○チンに塗りこむように撫で回してから、再度肉棒を握りこんで、根本の方に向かって引いていく。一度射精した後で、多少萎んだオチ○チンの先、亀頭が剥き出しになった。



「やっぱり男の子は、亀頭が一番敏感なものね？」

リリムは握りこんだ手をオチ○チンに触れるか振れないかに緩めて、笑った。

「さく。シゴクわよくくく♥♥♥♥」

そう言うと、彼女はユーリが「止めて。お願いですから。お願いしますっ！」と懇願するのも待たずに、右手を上下運動させた。一切の魔力を使わずに。それは、決して他に勝るような素晴らしい手技ではなかったかもしれない。むしろ初心な女子がおっかなびつきり行うような、下手なものだった。

しかし今のユーリを陥落させるのであれば十分すぎる破壊力があつた。一切の抵抗、反骨が許されない状況下では、少年のペニスには十分過ぎる圧倒的な快感だった。

あるいは、この程度の下手な手こきで、逝かされてしまったという屈辱を与えるためにリリムはあえてそうしたのかもしれない。しかし、今のユーリはそんなコトを考える余裕など無い。自らの全てが押し流され、自己を認識する記号に快樂だけが残る。

全身がシゴカれるオチ○チンそのものだと感じずにはいられない。涙が更に溢れ出し、懇願の声は泣き声に変わり、射精する精液の量は増え、全身が痙攣する。鼻から吸い込まれる息は熱く、魔族2人が笑う声が耳に残る。

次第にリリムの手の中にユーリの漏らした精液が満ちて、ローション代わりに滑りをもたらした。その精液には手こきの摩擦熱が籠っていく。まるで、そこが膣だと誤認させるかのような暖かさがオチ○チン越しにユーリの脳まで届いていく。

されど、リリムは満足しない。

だからその手を止めない。何度も、何度も、何度でも。何回でも射精させる気なのだ。絞り尽くすだけでは、リリムは満足しない。絞りつくす前に新たに精液を創造させ、恒久的に射精させ続け、その精液の中でユーリを溺れさせるまで満足しないだろう。あるいはそれでも満足しないかもしれない。

いまはまだ童貞男子の、強かったはずの勇者が泣いて懇願しているから、この程度で済んでいる。そう考えるのがリリムの言動から推測するべき事実だろう。

自分は、このまま永久に射精し続けさせられるのかもしれない。メリイのしている前で。SEXとは到底言えない、タダの手こきで。抵抗することも、逆らうことも出来ずに。

そう思った瞬間、勇者の涙が一段と、多く溢れた。その涙が頬を伝っていく感触をユーリ自身が感じると、呼応するように二度目の射精を、汚い白濁を漏らしてしまった。



精液が魔法の闘衣にかかる。せっかくエルフの女王が三日三晩寝ずに編んでくれた魔法の闘衣だったのに。一滴だけじゃない。たくさん。たくさん。精液が今、この瞬間もオチ○チンの先から垂れている。

もしもエルフの女王に再び会うことがあるならば、きっと落胆するだろう。二度と編まない頑なに断る女王が、魔王を倒すことを条件にと心を込めて編んでくれたものなのだから……。

自分は言い訳しようのない、取り返しのつかないことをしてしまったのだ。

ユーリが自己嫌悪に陥る間も懇願も出来ずに泣きじゃくる間も。ずっと2人の魔族は幸せに満ちて笑い、勇者がいかにも人間らしく丹念に積み上げてきた他者との信頼関係を陵辱して、愉しんだ。

終わらない手こぎ。射精。陵辱。笑い声。涙。

それらは捕縛されてから、おおよそ48時間の間に休みなく続けられた。

「これは人間の世界の言葉で『愉悦』という感情だそうです。魔王陛下」

「……ああ……堪能したわ……。最高よっ！ 最高の気分っ！」

「魔王陛下。そろそろ」

「はいはい。分かっているわ。勇者様は人間なものね。壊れちゃうって言いたいんでしょう？」

「は」

「しょうがない。エム。勇者様を寝かして差し上げて。それからその馬鹿女のこと……頼むわよ」

「あ。かしこまりました」

「ん。あくあ。また公務か。嫌だなあ。あ、勇者様♥ 公務が終わったら戻ってくるから待っててね♥ そ・れ・か・ら、童貞卒業できて……良かったね♥」

ユーリはリリムが部屋を出るのを夢虚ろになりながら、聞いていた。もはや身体が動かない以上に、精神が反応しない。背を向けて油断しきっている魔王に、敵意の視線をぶつける気力さえない。

そして同じ部屋の中で、メリイがエムに何かをされていることだけは感知できた。もち



## 魔王リリム

ろんユーリは何も出来ない。侮蔑と敵意の感情をむき出しにするメリイに幾度と無く、何かの呪印と何らかの物理的なダメージを与えられていることを知りながら、ユーリはチングリ返しのまま放心していた。唯一自由になる口元で、「お願いします。許してください」とここにはいない魔王に懇願しながら。

第2章 オネシヨとオムツと、勇者様。

散々に手こきで逆レイプされた後、ユーリは意識を手放してしまった。それはエムの睡眠導入魔法による強制睡眠をきっかけにしていたが、実際問題として彼の体力消耗具合も生半可なものではなかったからだ。常人なら命が耐えていてもおかしくはない。むしろ生き残った方が不思議なくらいの疲労。それゆえに意識を手放してしまった。

意識を失ったユーリは知らなかった。メリイがどういう目にあっているかを。メリイがエムに何かをされている。その程度の認識だけが頭の端にようやくこびりついているだけだった。

ユーリが目を覚めたのは3日後。起きた時最初の違和感。それは自らの両手のナックルガードの上から手錠がかけられていることだった。おそらくは手こきレイプをされた机の上だろう。硬く、鉄独特の冷たさがある。次の違和感は魔力。途方も無い量の、認識しきれないほどの魔力も持ち主が至近距離にということ。ユーリは慌てて顔を上げようとした。だが当然、上がらない。

「くっ……っ！」

突然、誰かが覗きこんできた。寝起きの瞳と逆光でぼんやりとして顔が見えない。

「お目覚めですか？ 魔王陛下の手こき責めを受けて3日で起きるとは……流石ですね。勇者様」

「……………」

その声はエムだった。しかし、自分を覗き込んでるのはエムじゃない。山吹色にも近いほどの濃い黄金色の髪が側頭部で結われている。

「メ、メリイ？」

「そうですよ。覗きこんでるのはメリイです。メリイ。勇者様から離れなさい」

「……失礼しました。エム様……」

メリイの瞳に光が無い。否、光が無いのではなく闇がある。深く汚い沼のような闇が。そしてユーリを無表情のまま覗き込んでいた。しかし、エムによってそれも制止され、今は部屋の端で正座している。

ユーリはメリイの胸が肌けていることによく気がついた。ネヴァを出発した時に、騎士団からもらった胸当てが無い。オツパイだけが突き出るように周辺の布ごと引きちぎられている。右上から左下に向かって広がって引きちぎられているのに、オツパイには傷一つついていない。スカートも引きちぎられ、白いパンツが丸見えになっている。刃物や鞭のような武器、拷問具を使って引きちぎられたワケではなく、肉体を傷つけない魔具で切り裂かれたのだろう。

「お：おいつ！ 使い魔っ！ メリイに何をしたっ！！！」

「メリイは躰を受けたことのない野蛮な人間だったので、少しでも良い子になれるように躰ただけです。勇者様」

「し、躰？」

「そうです。躰ですよ。勇者様も、今日から躰を受けて頂きます。魔王陛下の寛大さに見合うだけの、勇者になって頂きます」

「ま、待てっ！」

エムはユーリの制止を聞かずに、エムに何かを指示した。以前のように呪印を用いたわけではなく、人間と同様に権力を用いて指示をしている。言うなれば領主がメイドに指示に従わせるように。何の魔力も用いずに。

メリイはその場で立ち上がると、「うふふふ」と声を上げながら部屋の外に出ていって、すぐに戻ってきた。両手で銀のトレイを運んでいる。銀のトレイの上には食器が並んでおり、食器の上には暖かそうなトマトスープ。見たこともない黄金色の発泡する水が注がれたグラス。ユーリの生まれ故郷にしか存在しないオニギリが3つほどよそわれていた。

「…お口に合いますかどうか…」

メリイはトレイをユーリの寝転がされている机の端に置くと、スープをスプーンで掬って、ユーリの口元に運んだ。

「こらこら。メリイ。無断で勇者様にお食事を給仕してはなりません。立場をわきまえない

やう」

「…はい。失礼しました。エム様…」

ユーリには何がなんだか分からなくなりかけた。なぜ、メリイはエムのいうことを聞いている？ 言葉遣いも以前のような親しみやすさが無い。何より明らかに瞳の色が可怪しい。あんな闇沼のような暗さはなかったはず。

ユーリの頭の中で、かつて洞窟の奥底にしかないドワーフの長老から聞かされた伝説がよみがえった。たしかあの話は「気をつけよ。瞳に闇を込められた人間は『闇落ち』し、自らの意志で敵に寝返り、敵に服従し、敵そのものとならん」という話だったはず。そうか、これがドワーフの言う『闇落ち』か。どうやら洗脳ではなく、自らの意志でそうしているように、仕向けられたということか。タチが悪い。

ユーリは冷静にそう分析した。その分析が終わるのを待っていたのだろう。エムがメリイの代わりにユーリの側に立ち、「毒など入っておりませんわ。そんなものを入れたら魔王陛下に殺されてしまいますからね。私は所用があつて行かねばなりません。食事はメリイに手伝ってもらってください。良いですね？」と言い残し、部屋から出ていってしまった。

この時、ユーリは見逃さなかった。エムがドアに何の呪印、魔法をかけなかったことを。ドアの内側にも外側でも魔力が介在している様子がない。これはチャンスだ。手錠さえ外れば、逃げる事が出来る。メリイを連れて一度撤退し、体勢を立て直してから再度挑戦しよう。歴史上の勇者は皆、そうしてきたと書物で読んだことがある。

しかしどれだけ「逃げようっ！ 手錠を外してくれ！」説得しても、メリイはユーリの言葉に「…なぜ？…」としか返事をせず、淡々と無表情のまま食事をユーリの口元に運ぶだけだった。

そんな悶々とした時間も、人間世界の一昼夜ほどで終わりを告げた。ユーリは説得に疲れ、そのまま机に拘束されたままで眠ってしまったからだ。しかし、さすがは勇者。眠りながらもユーリはエムがこの城に帰還したことを魔力で感知した。もちろんそれ以上の行動は起こせなかったが…。

ユーリが眠りから目覚めると、下半身がもぞもぞした。ゴワゴワというほどの異物感ではない。柔らかい布で股間を覆われている。そんな感覚だ。夢現にユーリは、(ああ、魔王に捕縛されたのは夢で、下半身裸にひん剥かれたのも夢だったに違いない。だって、股間に衣服の感触があるもの)と考えていた。

「違いますよ。勇者様。全くもう…クスクス…」

勇者が目を開けるとそこは見慣れた天井。魔王の奴隷保管部屋だった。夢現は夢のまま終わり、現実がお目見えする。現実にはエムの声とともに始まった。

「…こんなことつて…」

「????」

ユーリは股間の衣服あたりでマジックテープがはがされる音とともに、メリイの言葉を聞いた。そしてだんだんと身体の感触が戻ってくる。硬い机の上で寝転がされているので体中が軋む。拘束されているので寝返りを打つことが出来ず、背中に痛みが走る。しかし、何よりも身体の感覚で違和感があるのは股間だ。濡れている。暖かな水。体温よりも少し高い気がする。いや、かなり暖かい。

「え？ え？ え？」

ユーリはその水が何なのか見当がついた。オシッコだ。漏らしてしまったのだ。眠っている間に。

「クスクス」

「…恥ずかしい男…」

エムの漏れ笑いと、メリイの言葉が何度も何度もユーリの頭に響いては消え、響いては消える。ユーリは思わず上半身を上げて股間を確認しようとした。もちろん叶はずもなく、身体は動かない。

「ご覧になりたいですか？ 勇者様」

「待てっ！ 待ってよっ！ 何が…何が起きてるっ!？」

「仕方ありませんね。まだそんなことを言ってるんですか？ 勇者様。あなたはオネシヨをしたのですよ。人間の子供なら誰もが一度はするのでしょうか？ あのオネシヨですよ。メリイ。勇者様を起こして差し上げなさい」

「…はい。かしこまりました。エム様…」

メリイがユーリの肩を掴み、そっと上半身だけを起こす。そこには紛れもなく自分の股間。先日エムによって剃毛された無様なオチ○チンがあり、お尻の下にはサイズびつたりのおムツが敷かれている。なによりもおムツの中はまっ黄色のおシッコでぐっしよりと濡れていたのだ。

「もう少しブザマになって頂きますよ。勇者様」

エムはそう言うと、ユーリの瞳の奥に呪印を流し込んだ。ユーリは魔力で抵抗を試みたがまったく太刀打ちできずに両足をM字状に開脚し、ア○ルまでがきちんとエムに見えるように腰を浮かせた。

「クスクス。今のは抵抗のおつもりですか？ 貧弱というよりも、まるで赤ん坊のようですね。はい。もう少し足を開きましょうか。ええ、それでよろしいですね。勇者様。次からもオネシヨをしたら、お尻の穴まできちんと見せてくださいね。ア○ルまでおシッコがつたっているかも知れません。放置するとかぶれますからね」

「くっ……っ！」

エムの事務的な口調の冷たさに、ユーリは目に涙が浮かべた。どうやらリムに逆レイプされて以来、自分は泣き癖がついてしまったようだ。それが悔しい。完全に良いように扱われていることを肉体が認め、恥じている証拠がこの涙だからだ。

「…この、お漏らし野郎…」

耳元でメリイがつぶやく。それは声と言うよりも、吐息に乗せて気持ちを伝えるようにそつと囁くと言う方がふさわしいかもしれない。そのつぶやく方は、表面上の感情ではなく心からの本心で、ユーリを侮辱しているのだと、その場にいる全員が理解できた。そういう囁き方だった。

「あまり勇者様をバカにはいけませんよ。メリイ。勇者様は、まだオネシヨをしてしまう程度の男なのです。これからお仕置きを受け、反省し、オネシヨをしないような男になっていただければそれで良いのです」

ユーリはエムの『お仕置き』という言葉に、嫌な予感を禁じずにはいられなかったが、今はどうにかこの、自分が出したおシッコの香りだけを何とかして欲しかった。とにかく疲労が溜まっていたせいか、強く香る。色も濃い。それが余計に子供じみていて恥ずかし

く感じた。

「ではオムツを外す前に、股間についてオシッコを拭きとって差し上げます。しかし、勇者様。その前に私に言うことが有るのではありませんか？」

エムが何を要求しているのか、ユーリには分かっていた。『オネシヨをしてしまいました。オシッコを拭いてください。お願いします』の一言。懇願と哀れみを乞う言葉だ。…とても勇者と崇められ、讃えられ、送り出された自分には出来ない。たとえジョークであったとしても出来そうにない。勇者は誇り高い生き物だからだ。しかし、ユーリが今置かれていた状況はジョークではない。この場にいる全ての女性が本気だ。全ての女性がただ勇者を陵辱し愉しみたい。そう思っていることがはっきりと肌で感じる事ができる。そういう空気が満ちていて、肺の奥から心まで締め付ける。

それでも…。

それでもユーリは生き残って、魔王に打ち勝つ決意を自らのプライドよりも優先した。あるいは、優先せずに自己を保てなかったのかもしれない。

「お…、オシッコを……その……拭いて……くだ……さい」

「……………」

「…ユーリ。それでは、ダメよ。もつとはつきり、どうして欲しいのか言わないと…」

「メリイの言うとおりです。勇者様。一度できちんと言えなかった罰を与えますね。『オネシヨをしてしまいました。オマタをポンポンしてください。お願いしまチュ』とおねだりしてください」

「お……オネシヨを……」

エムの笑顔に、ユーリの瞳に涙が溢れる。こうまでしないと生き残れないものなのか。いつそ殺して欲しい。しかし自分は殺されることはないだろう。魔王が自分にご執心だからだ。ユーリはそのことを分かっているからこそ、悔しかった。目の前の使い魔は、魔王の希望に沿って自分を教育するつもりなのだろう。オネシヨをさせ、嘲笑い、屈辱の懇願を吐かせながら…。

「オ…オっ！ …オ…オネシヨをしてしまいましたっ！ ……お、…………オマタをポンポンしてくださいっ！！！！ お願いしま……しま……チュ」

「はい。よく言えましたね。勇者様」

エムがあえて「勇者様」とゆっくり言うことが、もどかしい。発動しないと分かっている魔法でも撃ってやりたくなる。しかし魔力を消耗して逃走の魔力まで失ってはならない。そう理性が命令してくるので、何の意味もなさないと分かっている魔法さえ唱えられない。もしも魔法を撃って、気だけ晴れても逃走出来なければ何の意味もないのだ。

「では行きますよ。ポンポン♪ ポンポン♪ ポンポン♪」

漆黒の使い魔は、歌いながら柔らかなティッシュを丸めて勇者の股間を拭いてゆく。亀頭の周りは特別重点的に行う。ユーリが仮性包茎だからだ。皮の中にオシッコが貯まっていればかぶれる。そう配慮してのこと。優しさを装った与恥に、ユーリは赤面した。ア○ルの周りも、オチ○チンの根本も。綺麗にポンポンと拭き取られ、挙げ句の果てにはすぐ乾くようエムが「ふーっ」と吐息をかけてくる。その間ずっとユーリは見えていなければならぬのだ。自分が漏らしたオシッコを綺麗にしてくれる女性を。

「…うふふふ。だっさくい…」

メリイの囁きがユーリの心に止めを刺す。ユーリは全身が痙攣していくのを止められなかった。それはつまり…。勇者の心が折れてしまった瞬間だった。

